

# 『変態心理』と『ドグラ・マグラ』

——正木教授の人物設定に基づく一考察——

小林 梓

はじめに

科学に対する迷信、外国の模倣、死んだ道德觀念なぞいう現代社会の所謂常識なるものに飽き果て、変化澁刺、奔放自在なる生命の真实性そのものの表現の渴望する心……すなわち溢れるばかりの好奇心に輝く眼を以てことに吾輩が研究の主題として選んだ材料を、今の学者の流儀で名付けると、遺伝性、殺人妄想<sup>1)</sup>、早発性痴呆、兼、変態性欲とも名付くべき、世にもややこしい代物と来ているんだから厄介この上もない。

(『ドグラ・マグラ』「空前絶後の遺言書」より)

社会から「変態」「性欲」と呼ばれるものが、人々に好奇の目を注がれつつ疎外されていく中、雑誌『変態心理』が刊行され、大ブームを起こす。この後一九一九年末には「<sup>1)</sup>性」雑誌乱立期の「<sup>2)</sup>卑俗浅薄なる性欲学書の濫発」が起こるのだが、『変態心理』は性と異常心理を科学の面からアプローチしようとして刊行された雑誌である。

『変態心理』の執筆や援助にまわった文学者は数多くおり、近年ロビンソンの影響が指摘される朔太郎もその一人である。朔太郎同

様、主人公の精神不安が問われる久作文学には、頻繁に夢中遊行や殺人妄想、精神病患者、サディスト、変態、狂気と表裏一体の天才が登場する。先行研究ではベルグソン、ヘーゲル、フロイトなど多くの西洋精神医学・哲学との関連が長らく指摘されているが、強烈な個性をもつ登場人物たちのモデルの有無については、作中にも登場する「カリガリ博士」との一致が挙げられて以降停滞している観がある。江戸川乱歩は「夢野君の書かれた狂気の世界は、狂人自身<sup>3)</sup>が書いた狂気の世界で、文学者が書いた狂気の世界ではない」と評したが、実際に久作が狂人の言を参考に小説を書いていたならば、この評も納得ができればよい。久作の『ドグラ・マグラ』執筆時期と、『変態心理』『変態性欲』の隆盛時期が重なることから、本稿では「狂人」「変態」を足がかりに『変態心理』を検証し、『ドグラ・マグラ』設定の源流、そして第二の主人公である正木教授のモデルを明らかにすることを目的とする。

## 一 コンセプトの一致

『変態心理』は、大正六年十月から大正十五年十月まで日本精神医学会から刊行された雑誌である。漱石門下の中村古狹を中心とし

て、フロイトなどの精神病理学やベルグソンなどの西洋哲学、異常心理、自殺から心靈などのオカルティズムに至るまで幅広く紹介された。全一〇三号で、『変態心理』では、初期から性の問題を扱い、『異常性欲』に関する論文も掲載されている。大正一一年五月には姉妹雑誌として雑誌『変態性欲』が、『変態心理』第九巻第五号と並んで刊行される。『変態心理』の刊行の言葉を引用したい。

変態心理学の所謂変態は、正常心理学に所謂正常と相對して用いられている言葉ながら、強ち病的を意味すべきものではない。それが単に原則に対する例外と云うだけの意味でもあり、単に尋常に対する異常と云うだけの意味でもあり、単に凡庸に対する非凡と云うだけの意味ともあり得べきことを忘れてはなりません。

「変態」の定義を、病的な欠陥ではなく「凡庸に対する非凡」とする考えは、久作の描く「変態」の設定と一致している。久作は文中でも彼らを「天才」「狂人」と二つの呼称で呼び、常人には理解されがたい「非凡」な存在として、両義的な意味をもたせる。正木教授に至っては、社会的な貢献が望まれる人物としても機能しており、関東大震災後流行した一般の「変態」という言葉、社会の枠組みから漏れた落伍者という認識では、これらの人物が描かれていないことは明白である。

『変態心理』では、最新の医学・哲学を紹介する一方で、現在の科学の枠には収まりきれない超常現象も同じ土俵に扱っているが、これはこの雑誌が「近代化の過程で排除され、隠蔽されたすべての

ものに光を当て、社会に解き放つことを目的としたからだという。科学での解明を挙げつつ、近代化への批判を内包した『変態心理』という雑誌のコンセプトと、近代的な医学・哲学を登場人物に発言させることで、逆接的に科学で実証困難なアイデンティティーや無意識の存在を強調する久作の手法は似ている。どちらも近代的な「実証解明の精神」を揶揄しているのである。近代批判は、『ドグラ・マグラ』から、『街頭から見た新東京の裏面』や『東京人の墮落時代』などのルポルタージュに至るまで、久作作品に一貫して流れるメッセージでもある。

夢野久作は「ぶろふいる」に書かれた「甲賀三郎氏に答える」という文章で、探偵小説についてこう語っている。

あらゆる虚栄と虚飾に傲る功利道德と科学の莊嚴：燦爛として眼を眩ます科学文化の外観を掻き破つて、そのドン底に委縮し藻掻いている小さな虫のやうな人間性：在るか無いかわからぬ超顕微鏡的な良心を絶大の恐怖、戦慄にまで暴露して行く其の痛快味、凄惨味を心ゆくまで玩味させるところの最も大衆的な読物でなければならぬ。

近代化が進む大正期の日本。急激に画一化されていく社会のシステムは、多様性を孕むヒトにもそのメスを向ける。また西洋精神医学が発達することによって、日本にも「正しさ」を定義する解明の精神が流入し、常態と変態との差別化に、異常な関心が示されるようになった。その中で久作は、社会の流れと逆行するように「狂人」「変態」「精神病患者」という社会から疎外された存在を物語の中心

に配置する。それは彼らの「急速な近代化による変化の犠牲者」としての一面を認め、その悲哀を描こうとするからである。軽薄な好奇心による排他的風潮を懸念し、「異なる存在」を正しく解明しようとした『変態心理』のコンセプトや、近代化の弊害としての精神病患者の増加を指摘した呉秀三の主張と同じく、久作も近代化に伴って失われていく存在の大きさを危惧した。『変態心理』でも『ドグラ・マグラ』でも、内包される近代的な知識は、かえって近代化のアンチテーゼとしてうまく機能していたのである。

## 二 『ドグラ・マグラ』に与えた影響

一で確認したように、『変態心理』と『ドグラ・マグラ』は『変態』「狂人」の定義の相似、そのコンセプトも最新の科学を使った近代批判という大枠が一致している。次に、細部の記事から『ドグラ・マグラ』への影響を見つきたい。

(一) 菅原教授「頭蓋骨の興味」(『変態心理』創刊号 大正六年一月発行より)

『ドグラ・マグラ』で記憶を失った「私」は、若林教授に亡くなった正木教授の部屋(九州帝国大学、医学部、精神科本館)に案内され、そこで『ドグラ・マグラ』という論文を発見する。ここで印象的なのは、「私」が読者と同じ視点に立って、細部まで部屋を観察・説明しようとする点だ。記憶を失った「私」と、物語の展開の見えない「読者」の立場は、知識がゼロであるという一点で重なり、読者は「私」の目で正木教授の部屋から、物語の何らかのヒントを得ようとする。部屋には精神病患者の残した作品や、硝子戸棚

の中には、「並外れて巨大な脳髓と、小さな脳髓と、普通の脳髓の比較」、「色情狂、殺人狂、中風患者、一寸法師等々の精神病状者の脳髓のフォルマリン漬け(いずれも肥大、萎縮、出血、又は梅毒に犯された箇所の鮮明なもの)」、頭蓋骨などが収められている。これらは教授の精神病患者の人体への異様な関心を示すとともに、大学教授の研究室というアカデミックな場所でありながら、彼の研究がオカルティズムにあふれたものであったことを読者に印象付ける。また正木教授の研究は(精神病患者と人体の異常を関連付けて研究する)、『変態心理』の刊行の言葉「所謂精神上の故障は所謂肉体上の故障を伴うもので(中略)つねに互に原因結果の関係を有し合つて居るのであります」と重なり、それは『一足お先に』など本テクスト以外の久作作品にも、「異常」を学術的に説明する際に頻出する設定となっている。

この『ドグラ・マグラ』の序盤のシーンと、『変態心理』創刊号の記事内容とは重なる部分が多い。「頭蓋骨の興味」と題された記事は、文学士菅原教授が感じる「頭蓋骨への興味」が書かれたものだが、テクストと一致する表現の記事から引用したい。

机には地球儀、砂時計、定規、コンパス、魔術書、薬品等が置かれ、戸棚には聖書や殉教者の骸骨や頭蓋骨や骨片や遺品等が神秘的に並べられてある。

殊に戸棚の頭蓋骨が強く私の眼を惹き付けて、私に恐ろしい魔力を感じしめる。(略)頭蓋骨の恐ろしい魔力は、自分の眼の高さよりも仰ぐような位置に之を据えて、正面を向かせた時に、最も強く感ぜられる。

この気味の悪い魔術は、極り切った人間の宿命というものを徹底し過ぎるほど厳しく談るやうに見える。

戸棚の中に頭蓋骨や遺品が並べられるイメージは、「寝台から逆様に飛降りて自殺した患者の亀裂した頭蓋骨」が納められた正木教授の硝子戸棚と重なり、この記事にある戸棚の「聖書や殉教者」という表現に対応するように、正木教授の戸棚には「竹片で赤煉瓦に彫刻した聖母像」など狂人による宗教的作品が陳列されている。また記事の著者は、この想像上の建物に入ったときに「中世や文芸復興期時代の生活、殊に修道院や学者・錬金術師の書齋・仕事部屋の光景を、重く静かに心に描き出す」と述べている。

記事とテキストでは、他にも多くの酷似した語彙が見られる。「私」が「運命附けられた」ように目にするのは「中世期」の魔女狩りの図であり、対して記事では「中世的な感情」「宿命」「気味の悪い魔術」などが頻出する。また頭蓋骨の「神秘性」を語る記事同様に、「私」も正木の部屋に「神秘性」を感じる。以下の部分はテキストの引用である。

それ等のすべてが、清々しい朝の光りの中に、或は眩しく、又はクッキリと照らし出されて、大学の教授の居室らしい、厳粛な静寂を作っている光景を眺めまわしているうちに、私は自ら襟を正したい気持ちになって来た。

事実……私はこの時に、ある崇高なインスピレーションに打たれた感じがした。(中略)好奇心なぞというものは、どっかへか消え失せてしまつて……何事も天命のまま……というような

神聖な気分にあふたされつつ詰襟のカラを両手で直した。それから神秘的な運命の手によって導かれる行者のような気分でソロと前に進み出て、参考品を陳列した戸棚の行列の中に歩み入った。

中世的・宗教的な面影を残す正木教授の部屋の様子と、頭蓋骨への興味。またその部屋に入った「私」が感じる「神秘的なインスピレーション」や「天命」の存在など、記事内容とテキスト内の正木教授の大学研究室は、多くの一致点を見せる。久作が記事を参考に、正木教授の部屋を設定した可能性は高い。

## (二) 中村古狭「二重人格の少年」(創刊号より)

「二重人格」の少年は、古狭が『心理研究』第六五号に於いて紹介した少年であり、彼の相談内容は、真面目な第一人格が不真面目な第二人格によって正常な日常を侵されているというものであった。記事と「ドグラ・マグラ」は、無意識中に罪を犯した「二重人格の少年」の治療という設定が共通する。また、「二重人格の少年」の事例を記した古狭の記事は、W氏(若林教授)の手記に拠る「心理遺伝論附録」と形態を同じくする。

次に呉一郎が覚醒後、警察に於て、母親殺しの嫌疑の下に尋問を受けし際、茫然自失しながらも「そんなら、自分が殺しておいて忘れてるんじゃないかしら」というが如き、極めて軽微なる疑問が動きおりし事を告白せるは、一見、同人が自己の夢中遊行の幾分を記憶に止めおれる重大なる証左なるが如く思

惟さるべし。(略)尚、以上述ぶるところに依つて、古來、夢中遊行病者が一種の二重人格の所有者なるが如く思惟せられおる事が、真に近き理由をも理解するを得べし。すなわち、祖先代々より遺伝し來りたる無量の記憶と、その血統中に包含せられたる各人種、各家系、各個性等の無数の性能の統一體たる一個の人間の性格のうち、その一部が覚醒中に分離してあらわれたるものが所謂二重人格にして、同じく睡眠中に発露されたものが夢中遊行なり。(『ドグラ・マグラ』「心理遺伝附録」より)

若林のこの科学的「二重人格」という診断を、正木教授は「離魂病」による「自我忘失症」と診断し、「心理遺伝」による呉青秀の人格の覚醒とする。では、記事とテキストの一致点を簡潔に挙げたい。

第一に、少年の問題は、「無意識に母親を苦しめること」であり、呉一郎の「無意識中の母親殺し」と治療目的が一致する。第二に古狭はこの少年、山田正雄の第二人格と第一人格を離すため、「彼を深い催眠状態に導いて、最近の事件を詳細に自白させ」説得しようとする。テキストもまた「私」が目覚めてから再度深い眠りに陥るまでの、無意識中の罪への葛藤と、若林・正木両名が主人公に「事件を詳細に自白させ」説得しようとする過程が描かれている。第三に、亡霊化した父の出現と、強硬な人格統一に対する抵抗が挙げられる。記事には二回の施術で、亡き「父親の亡霊に鞭を加えさせたりして、散々酷い目にあわせて漸く第二人格を追い出した」が、その行為は「強制的」なものであったため第二人格の反感を買い、失敗したと書かれている。対して『ドグラ・マグラ』の「私」もまた、論文を読んでいながら、死んだはずの父正木教授と対面し、その

亡霊と思しき父の強制的な言動に、主人公は激しい抵抗を表す。古狭は治療の失敗の後、山田少年の第二人格を懐柔しようと新しい策を練る。

さうして散々相手(第二人格の山田)を喜ばせた挙句、若し永久に山田と離別するのが好まないならば、暫時の間だけでも善いから彼と絶縁して呉れるようにと頼み込んだ。此の出方が、大分第二人格に気に入ったと見えて、彼は急にはしゃいだ調子になって「よし、暫くの間と云うなら山田と別れてやろう」と云い出した。(中略)

「じゃ僕の方から年限を切るが、異存はないか。」

「異存はない。早く云え、早く云え。」

「では百年！」と余は言下に答えた。(中略)

「じゃ仕方ないから百年間別れてやろう。その代りおれにも少し言分があるから聞いて呉れるか。」

注目すべきは、別人格を「百年」眠らせるという古狭の発想であり、人格の統一を目的とする治療ではなく、一方の人格を別人として扱う治療行為だ。この約束を第二人格が了承したことで、第二人格が次に表出するのは必然的に山田少年その人ではなく、子孫あるいは来世となる。呉一郎が行った犯罪(母親殺しやモヨヨ子の殺人未遂)は、一千年前の呉青秀の変態性欲が覚醒した状態によって誘発されたものと、正木教授は主張する。少年の無意識中の犯罪、二重人格の検証という形態、少年の母への加害と人格統一への苦悩、そして別人格の遺伝、第二人格の百年後の覚醒など、古狭の記事は本テ

クストの設定に大きな影響を与えたことが考えられる。

(三) 上野陽一「正態と変態」(一巻第二号 大正六年一月発行)

即ち正態と変態とは理想と現実の差で、本当の意味の正態というものはこの世の中に実在するものではない。どんなに円満な暇のないと思われる人でも、どこかに変わったところのない人はあるまい。して見ると、世の中はすべてが変態で、ただ変態の甚だしくないものは、仮に之を正態と名づけ、その度の甚だしいものは変態と称して区別しているのである。(中略) 以上のことを言い換えると、百人の中、五十人位が気違であるともいえるし、百人が百人皆多少とも気違いであるともいえる。そして中位の気違いが即ち世の中の表面に立って、最も仕事をすゝめる人である。

(「正態と変態」より引用)

次にテキスト内の正木教授の主張を引用する。

吾輩は敢えて断言する：諸君も吾輩も共々に、精神病者と五十歩百歩の心理状態で生きているのだ。(空前絶後の遺言書)

もし、万が一にも「俺ばかりはキチガイじゃないんだぞ。絶対に完全無欠な精神を持っている人間なんだぞ」という自信を持っていてお方があったら、イツ何時でも吾輩の処へお出で下さい。そのお方は当大学の研究患者として、官費で入院さして上げる。ちょうどその式の患者が、学生の講義に必要なところだからね……。

(「地球表面は狂人の一大治療解放場」)

西洋的な二項対立で正態と変態を区分けしようとする世間の風潮を、上野陽一は「百人皆多少とも気違いである」と発言し、正木教授は「地球表面は狂人の一大治療解放場」であると評した。この過激な発言の主旨は、全く一致している。

久作の作品には「完全無欠」「パーセントの安全率」「完全犯罪」等の表現が頻出するが、大抵その完璧は崩壊する。

四 群山龍蛇「人間的證券―奇行教授の自殺」

(三巻第六号 大正六年六月発行)

正木教授は、天才と狂人が表裏一体であることを感じさせるキャラクターである。九州大学きつての秀才であり変人である正木は、首席で大学を卒業。その後欧州諸国を遍歴し、塙国理学博士、独学博士、仏国文学博士の名を得る。一方で、日本では地獄のチョンガレ節を、木魚を叩きながら当所なく彷徨う。こうして九州大学に帰って来た彼は、恩師の変死という異常事態(のち正木自身の狂行であることを自白)によって、教授職に異例のスピードで就任。狂人の解放治療場を作り、その場で呉一郎その他の狂人の行動を観察。呉一郎の先祖からの心理遺伝と、悪癖(変態性欲)の出現を画策するが、呉一郎が解放治療場で無差別殺人を実行したことで、この治療場は閉鎖。自殺。彼の実験は、「私」の痛烈な批判によって幕を閉じたかのように見えた。

奇行を繰り返す正木教授のモデルとも言うべき存在が、『変態心理』第三巻第六号で紹介されている。記事と正木教授とを比較したい。

大正八年二月十六日未明に、岡山医学専門学校の勅任教授であつた高橋金一朗氏が、愛刀粟田口で自殺を図つた。同僚のT博士、K博士其他二三の医者が駆付けた。頸部の創傷は極く軽微であつたが、自殺決行前に麻醉剤を用いたらしく、昏睡状態に陥つていたのであつた。昏睡状態は三日間も続いて、意識を恢復せずに息を引取つた。高橋教授は、明治二十三年頃東京帝國大学医学科を卒業した故に、医学士で、在学中は特待生の秀才であつた。

次に正木教授の自殺は以下の通りである。

然るに本日午後五時頃、大学裏海岸を通りかかつた抄魚釣り婦りの二名の男が、海岸に漂着している一個の奇妙な潮死体を発見し、この旨箱崎署に届出たので万田部長、光川巡査が出張して取調べたところ、懐中の名刺により正木博士である事が判明したので又又大騒ぎとなり、福岡地方裁判所から熱海判事、松岡書記、福岡警察署より津川頸部、長谷川警察医外一名、又、大学側からは若林学部長を初め川路、安楽、太田、西久保の諸教授、田中書記等が現場に駆け付けたが、検索の結果同博士は、同海岸水族館裏手の石垣の上に帽子と葉巻きの吸いさしを置き、診察服を着つけたまま手足を狂人用説性之手枷足枷を以て緊縛し、折柄の満潮に身を投じたもの

自殺の方法は異なるが、第一に奇妙な死に方であつたこと。そして同僚が検査していること。第二に在学中秀才と評され、医学科教授

という肩書であること。東京大学特待生であつた高橋教授は岡山の医学専門学校の教授であり、九州大学を首席で卒業した正木教授は、母校の精神科で恩師に推薦されたことで教授職に就任する。さらには人物像や他人の評価、取り巻く女性に至るまで奇妙な一致が見られるのである。記事から引用する。

夫人桃代子は岡山の絵葉書店の看板娘であつた。教授が永く独身生活を経て居た或る年―それは十四五年前である―或る日途中で行き会つた美しい女性に、医学上の新発見でもしたように引きつけられた。

第三に結婚の結びつきが一致すること。記事には、高橋教授の夫人桃代子との出会いが記されているが、正木教授もまた「絵を描くことが得意な」美女呉千世子と、医学論の実証「医学の新発見」のために、遺伝の問題を抱える彼女に近づき結婚する。「医学上の新発見」で結びついた結婚という記事との一致は偶然ではないだろう。さらに高橋教授の夫人の名前は「桃代子」とあるが、呉一郎の従妹で許嫁の名前も「モヨコ」なのである。

高橋教授と正木教授の人物像も周囲の人物評も、細かい点まで重なる。結婚しても書齋に籠りきり、新婦に口をきくこともないという高橋教授の奇行は、妻子の存在も学術上の成功を生み出す存在としてしか関心をもたない「学術の鬼」正木教授と重なる。また、高橋教授の同僚とは口をきかず、質問は黒板に記せとする授業スタイル。魚に羽織を着せる奇行まで記事には記載されている。

教授は外科学の講義は其處除けにして、川柳の講義に時間を潰すことが多かつた。殊に疑問が性欲問題に多いので、性欲に關する研究を始め、古今東西の奇書珍籍を蒐集して居た。(記事より抜粋)

第四に性欲問題に強い関心をもち、憑かれたように外国の奇書を収集、一方で日本固有の川柳や歌に興味を示していること。また、このような高橋教授の言葉も記事は記す。

「先生は何うして博士にお成りにならんです」と学生が聞いた。教授は、

「日本には未だ大博士の学位は出来まい。私は大博士でなくちや成らぬのさ。」

斯う答えた。実をいうと、教授は医学の外、文学、語学、社会学、性欲問題等該博な知識を有つて居た。知識が余り廣汎に涉り過ぎたかも知れない。が、教授は大博士を以て自ら任じて居た。

第五に「大博士」を目指し、医学的成功を望んでいること。また、医学以外の学問にも通じること一致する。正木教授も「大博士」になるため「學術の鬼」となり、日本にある従来の地位では満足できずに欧州を遍歴する。そして世界的な医学上の発見と社会的認知を目論み、呉一郎の実験を実行するのだ。学問も医学に止まらず、自己価値が高いことも高橋教授と酷似している。

以上的一致から、記事の高橋教授が『ドグラ・マグラ』の正木教

授のモデルとなった可能性が非常に高いことが明らかになった。これは「変態心理」の「奇行教授の自殺」という大正八年の記事が、昭和初年には構想・執筆が開始された『ドグラ・マグラ』の発想に大きな影響を与えていたことを示す。「材料の多い人」<sup>5)</sup>「大変珍しい材料を持つて居る人」と言われた久作であるが、材料の入手先の一つが、「変態心理」であつたことは間違いないだろう。

(五) 警視庁警部 前田誠孝「犯罪と変態心理」

(第一四卷第五号 大正一三年一〇月発行)

三宅鎮一「精神病学的に観たる悪人の特質」

(一八卷第一号 大正一五年七月発行)

前田警部は「犯罪と変態心理」であらゆることを社会における「優等特質と劣等特質」に分けて語る。優等特質とは、「国家社会に利益を与えるもの」であり、「有益なる社会的研究なり、宇宙的研究なり、正義人道の考察なり、學術の研究発達なり」の結果が、優良なる性質の表れだと述べる。一方、劣等特質とは、「学問をなして理を知り反つてそれを悪く利用して姦計をなすが如き」ことだとする。さらに警部は、犯罪要因に「金錢」と「性欲」を挙げ、近年の犯罪心理傾向を「虚榮的心理」、「共鳴心理」、「衝動的模倣性」などの「変態心理」に原因があると説いている。

注目すべきは、人の優劣も、社会的な関わりの中で、有益な学問をどのように提供したかで判断される点である。先祖から変態心理が遺伝したことによつて犯罪者となった呉一郎は、一方で學術的価値をもつた研究対象であり、狂氣の天才である正木教授は、有益な學術の新発見のために尽力する優等特質をもちつつ、「学問をなし

て理を知り返ってそれを悪く利用する」劣等特質も有する。どちらの人物においても、犯罪と学術研究が関連している点、社会的な評価を重視している点、犯罪要因に変態性欲が影響している点、この記事とテキストの一致点である。

「犯罪的な性質は、環境や家庭によって遺伝するものである」という考えは、優生学と結びついて当時の人々に抵抗なく受容された。「ドグラ・マグラ」では、遺伝と犯罪心理との因果関係が、正木教授の実験目的となっている。

この少年の骨相が、この事件の根本を支配しております心理遺伝と、重大な関係を持っているからで御座います。

……すなわち人間の骨相というのは、その先祖代々の血統の縮図……又、或る一人の性格というのは、その人間の先祖代々の精神生活の凝り固まりとも考えられるべきもので御座いますから、

(中略)

つまり只今からご紹介致します勦全絶後の怪事件の真相と申しますのは、要するにこの少年の鼻の穴の中に隠れておりました蒙古人種系統の心理遺伝が、一時に暴れ出したものと、お考えくださいば宜しいので御座います。 (狂人の解放治療)

ところでその人間の脳髓によって、時々刻々に反射交感されて、一粒の中に平等に含まれている、その人間の個性とか、特徴とかいうものは、吾輩の実験によると一つ残らず、その人間が先祖代々から遺伝してきた千心理作用の集積に外ならないのだ

……すなわち、その先祖代々が体験してきた、千万無量の心理的習慣性のあらわれが、脳髓の反射交感作用によって統一されてお互いに調和を保ちつつ、焦点を作って行くのは所謂、普通人と名付けているのであるが、しかし……人間の心理作用というものは一人一人ごとに、それぞれ違った癖があるもので、その癖を先祖が矯正しないまま子孫に伝えて来ると、代を重ねるうちにダンダン非道くなる事がある。

(絶対探偵小説 脳髓は物を考える処にあらず)

呉一郎の無意識中の犯罪行為は、芸術至上主義という「変態」呉青秀の心理遺伝が表出したものとし、遺伝という宿命に対して科学的検証を行うことが、正木教授の意図であった。この犯罪者の性質が、子孫の心身に遺伝するという設定の背景に、『変態心理』に度々記載されているイタリヤのロンブローゾの存在を仮定したい。

『変態心理』には、ロンブローゾの名前が早い時期から登場し、第一巻第二号には、既に新刊批評に「ロンブローゾ犯罪人論 寺田精一著」と目次に載っている。また雑誌には『天才論』の発売宣伝記事も記載されており、当時ロンブローゾは、注目の医学者であったことが分かる。ロンブローゾの検証について詳細に言及したのが、三宅鑑一の記事「精神病的に観たる悪人の特質」である。

ロンブローゾは、犯罪者の中には生来的に罪を犯す特質を有する者があり、これらの者は病的者か若しくは身体的構造に異常あることを認めていると云い、之れに生来性犯罪者の名称を附した。

『変態心理』に掲載された二つの記事には、犯罪とその犯罪者が生来持っている犯罪因子を、社会面と変態性欲、遺伝から具体的に検証したものであり、特に犯罪者の遺伝という点で、テクストへの影響が考えられる。

### まとめ

「材料の多い人」と言われた久作だが、彼の生前から今に至るまで、その「材料」は偉大な父杉山茂丸の影響や、精神病院の入所経験、能楽教授、僧侶、新聞記者など異なる職歴から得られた知識だと理解されがちであった。しかし、『変態心理』のコンセプトや記事内容と本テクストの比較検証によって、久作の材料の多くが『変態心理』内の情報に拠るものと分かった。また本稿では、代表作である『ドグラ・マグラ』のキーパーソン・正木教授という人物設定に、実在にいた高橋教授という明確なモデルが存在した可能性が高いことを論証した。以上の解釈から、精神医学・哲学・仏法・古典芸能と、多岐に渡る久作の知的好奇心を満たすツールとして、『変態心理』が大きな役割を担い、『ドグラ・マグラ』他、久作の小説設定に大きな影響を与えていたと考えられる。

東京よりも情報の入手が滞りがちな地方作家でありながら、豊富な情報を駆使して小説に投影した夢野久作。その情報源の一つとして、『変態心理』があったことは確かだろう。

註(1) 斎藤光「解説」(復刻版『変態性欲』別冊 不二出版 平成二二年十月)

(2) 同右から引用した。内容は、「古狭の下で雑誌の編集に携わったメンバー」のなかには北野博美、栗山信次郎がいるが、(中略)民俗学関係

では、柳田国男、南方熊楠、金田一京助らも寄稿している。文学者や文芸関係者になると、さすがに多彩である。(略)古狭はじめ、宮島資夫、沖野岩三郎、前田夕暮、井東慶、高群逸枝、中村星湖、浅見淵、高橋新吉らが寄稿している。「私の変態心理」(大正二二・一〜三)というアンケートには萩原朔太郎や牧野信一ら多数の文学者が興味深い回答を寄せている。それらを見ると、直接雑誌に書いていなくても、読者として興味を持っていた文学者は、これまでに知られている谷崎潤一郎や宮本百合子以外にもたくさんいたのではないかと思われる。」とある。

- (3) 江戸川乱歩「夢野久作氏とその作品」(『探偵春秋』大正二二年五月号)
- (4) 呉秀三「精神病者と其救済」(『国家医学界雑誌』明治四四年九月)からの引用。内容は「社会の発展と比例する精神病の増加という見解は、人に自己の、あるいは取り巻く他者の精神病化を恐れて、自己への、そして他者への眼差しの強化と細密化を増進させる。人々の目にはこうして密かに監視の網の目が張り巡らされていく。精神病と診断された人々の監禁という事態のみならず、すべての人々が精神病学の言説の中に監禁されて行くのである。」とある。

(5) (3)と同じ。

(6) (3)と同じ。

〔付記〕本文の引用については復刻版『変態心理』(大空社 平成八年五月)、夢野久作『夢野久作全集 九』(筑摩書房 平成四年四月)に拠る。